

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

内村鑑三先生書問七

明治三十四年
明治三十五年

謹賀新年

明治四十三年一月一日

我等の外なる人は朽り行くも内なる人は日に日に
新たにせらる、夫れ我等が受くる目前の輕き苦し
みは限りなき重き榮を躰が上に我等に作り出すな
り、我等が目的とする所は見ゆる所の者にあらず、
見えざる所の者なり、そは見ゆる所の者は暫時に
して、見えざる所の者は永遠なれば也。哥林多後
書四章十六—十八節。

東京府下淀橋町柏木九一九

内村鑑三



きかは便郵

陸

中國花巻州町

齊藤宗二郎様

花巻教友會

御中

Union Postale Universelle.
CARTE POSTALE

x

今年用糸の頃を期し、小生
法地に至ると得るや、是れ
又法稱りしとたたり

拜啓 其後法書り

無之とて存る

陳氏際小生の由に著し

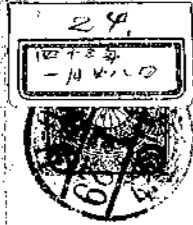
く聖霊が降り、三年が
人の智慧と信をよそ
神の聖旨と信り、且つ
研究熱が此上よそよそ
継続致すやう、特に
清新りて下たる信に頼上
か、事々

一月廿九日

鑑三

高橋君

花巻信見外



陸中花巻川口町
齋藤宗二郎様

1-28

東京府豊多摩郡滝橋町
大字柳木九百拾九番地
内村鑑三

本所 失形は存せし 本所 履き世史
信所 當方こそは分り兼小三付神田区美土
竹町 青年会気付今人宛として書状而差
出三相成りけし 到着可致と存、官左様取
斗り可とありし〇小生日下休養致居り市陰
を以て精神上にも大に得る所有る来り四月には
新しき確信を以て諸君と紙上に於て見ゆるこ
とを得るあらんと存し尚ほ祈禱を希望けし
下度小草々
二月十四日

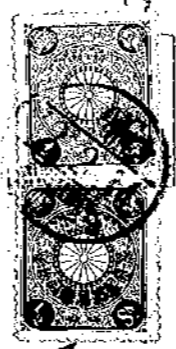
きかば便郵

陸 中国花巻
川口町

齋藤宗三郎様

東京府豊多摩郡深谷町

大字柏木九百拾九番地



POSTA
内村 鑑三



拜啓 寒気 揣は 嚴
しく 處 諸君 清 變

りよあらせらるる

草

叔 先般 類上 聖 通

リ清新穠口下リ毒の
効果現はれ一週間

前程より信仰マツキリ

と恢復致し久振リ

乙明かに主の聖顔と特

すらつとと得て感の時此

止あしりのみたうせば此

世の物は何にもあはり

不申、拙り静かに此書

室と守り一生と終るも

心の苦もよき毒と惜り

甲兵の守り兵國の守り

永久に生じざるや
之清新禱と清結と
と下たるは清正主に在
る昔が相と授くる
唯一の方法は新禱と以
てすまざるが

別紙の如き昔又の舞
込申すの果大なり
申す今後一切構大
なる程りに清正なる

皇極の直の法傳ハ
とすたるは清正なる
に由る可なり

千九百十年二月

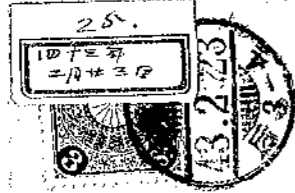
廿三日

鑑三

花巻

〇〇周子為見

謹啓、故師ニ在ルニ百十日、故師ト云
モ亦リ、浮世ノ外ニ漏シス、働カシバ、
フコトカ出来ス、ソレニシテモ、小サキ田
舎ヲ、職、業、ヲ、ウ、ル、コト、ガ、不、可、能、ト、ス
メ、ト、モ、ア、ト、ト、モ、ニ、サ、マ、ヨ、ウ、テ、廿、日、ニ、東
京、ニ、来、リ、シ、タ、致、白、二、月、廿、三、日



陸中花巻川口町
齋藤定郎様

✦
2-23

東京府豊原郡花巻町
大字杓木光百輪光番地
内村 鑑三



郵便状かき

東京府下田郡
滝橋町杓木
内村鑑三様

関三様宛

印刷局製送

郵便各局行

特啓、清書画面に接
し、清同情の至りに有
款、は貴兄を此 困
厄に於て見舞ひ
たの、且つは昨年 清

為父孀女清永眠々一

週年に當り殊に

清悲の哀々念ふ深かり

人とも清娘の事申す

に際にも有之且又

今春にも是非も

清に同被さるる計

書に有之に有之

明十五日夜行に出

癸十六日午六時

四十五分清地着の迄

車にて矢も上致すべし
か弓左様清義承知し
下たし。而して十七日
の日曜と清地にて守
り、十八日帰途に就き
申すべし。
今回は清見無得つた
もの矢も上ふれば旅費
等々義と決して清心願
及び不申し。且又滞在
は清都を以て由り旅館に

この頃ハハ馬を好ム
清義知ト云々
左申上たハ草

一九一〇年四月十日

鑑之

春為見

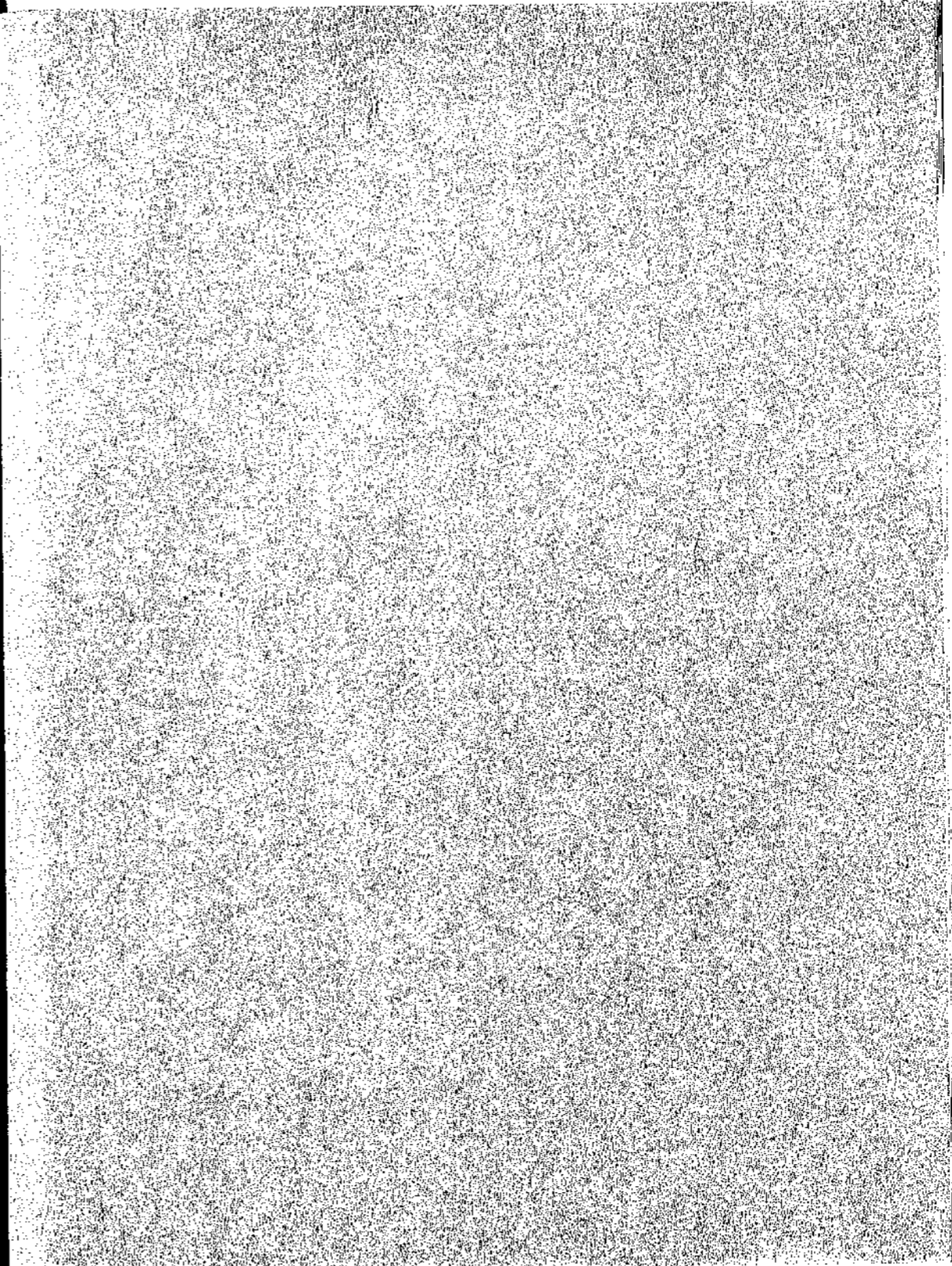


齋藤宗二郎様

陸中花巻川口町

4-14

東京府豊多摩郡滝橋町
大字柏木九百拾九番地
内村 鑑三



辨解、今テ回ハ久振リニ

コ矢多上致シ、諸君ト昔田

交ト温いろを得コ大候の

至リニ奉ルカ、小生等其

後小牛田、北浦、南郷、

石巻、野蒜、松島等

を引廻さし、仙台にて百人

餘の人、十字架の福音

を證明し、本宮、宇都宮

に友人の勝利の話を聞き、

昨夜八時感謝に跪きし

帰宅致しり。

小生は清地清君が在るに全

然退嬰主義と放棄せ

る。前進主義を固たに取

らんとすしを切望致し。福

音は生命ありは、他の生命と

均しく擴張せむは自然と
萎縮し去る者に法を以て

自己の信仰の維持の爲

より見ても 確實なる活動

は必要無くばいざなる書は法

度。小生自身も亦是に戦

闘開始と宣言せんとせり。

本宮重殿半二印氏の如き。

近頃中々關係せる本宮重

行の大華清と行はれ、如くの

十の如きもの書と書とを傳へし

由傳へし居らる。

他、清兄姉の宜しく清傳の事、
たゞ、清養出の荷物迄
に届居りか。
言清礼まごに申上る、葉

千九百十年四月廿二日

鑑三

花巻

南条君

昭一井君

26.
1947年
12月25日

陸中花巻川口町

斎藤宗二郎様

4-22

東京府豊多摩郡淀橋町
大字柏木九百拾九番地
内村鑑三

拜啓、其後御地よりは久しく
御便り無之に得共皆様御
変りなき事と存し、其後御
難題、如何に成り行きし哉
伺ひ申上り

先日、日詰町郡役所書記

らしき人にて三島民吉氏等

者少生方を訪はれ種々

信仰上の談話有之未だ

初歩にある者とは見受け

得共至て誠実の人と存じられ

市地に於て貴兄並に照井君

を訪ひ友誼を結ばれよと申

置は間若し市訪問致しは

何分宜敷願上

グンデルト氏一昨日を以て

愈々當地を去られ越後村松

に向はれ申し甚だ寂しく

感じし得共浅野君の来

我等を助けらるゝあり為めに
慰むる所甚からずト

爰に一私事の願上度件有之ト

佛培養の^{いちご}苺若し出来致し

毎年頂載致す分の外別に

一箱代價を以て佛賣渡し

と下度願上ト右外國人某

に送り其友誼を謝すると同時

に貴兄の手並を誇らんがめに

佛座ト有必ず佛聞入れト

必ず代價を佛請おとす度ト

皆様宜敷佛傳へしと度ト

草々

一九一〇、六月十三日

鉛三

花卷
齋藤君

十月十三日

東京府豊多摩郡滝橋町
大字柏木九百番九番地
内村 鍛三

陸中國花卷川口町
齋藤宗三郎様



抄の辨物致少くは解り難しと云
由大座の事には座の切今思はれ
善書に記すに山は遠く下は
厚意の程は有りしが中より
寄るおぼしき川野や田舎
にありては内村の所より常陸
へ至りては存不存今思はれ
疑はれし事には記すに
疑はれし事には記すに

きかは便郵



Union Postale Universelle
CARTE POSTA

柳本
内村
忠彦

藤原宗次郎様

陸軍大臣花巻川野

拜啓、兩回の草苺有難く頂
戴仕り、今年も亦思の神聖なる
方傳の結果と味も得て一方不
くぞ感の謝仕り。

昨日が二回分着目するや、聖子や、其の
一半と撥ふと雨と同月と本所より

性逸人ユニケル氏を訪り(彼は島
業ニ学校性逸治教師あり、業ニ
はキリスに教ふる友對と唱へ居たりと
グニデに女并に學生の友人にこそ無
類の善人あり、我業ニ對しは甚
からぬ同情を有す)之と其の留す

居の人に托し、一封の書をと寄つて
帰を致し、處今朝に至り氏は
返礼を述べんとす、わがく柏本ま
矢多り、七年の念や聖母と
賞賛して止まず、彼は所謂ちせ
輝く人に非ざり、曰く、此れは

本が一ちう、天白陛下もまだなご
召上りさるるよし、目下よりは今
は之を独逸大使に贈らるも恥とせず
余は未だ斯う如き者と此国に在る
味をしとある。余は昨夕も食せら
今朝も食せら。尚しと惜しかうも
少し、親友に分れせらうと

信し、半は君の履歴、君が之を作し
に、其の歴史を誇りし由、後生
一層興味を感じ、謝辞：謝辞
を重く返り申し、半は君の由こ
善き傳道を行ふを得しと感謝
致し、
君は彼が二三ヶ所は更に入らる

依頼請し。即ち毎年此荷を買
取らば由に清彦が。而して差し上等
の品は尚ほ残る。今年より之を
牛に入れたま由に清彦が。就ては清
都合に相成らぬ。牛に賜る
しと同の物も二箱丈々直に同
氏に送り届けておたす。即ち上野

駄止のとちをせ。清通知也。日本港可なり

東京本郷区弥生町一番地

ユンケル氏

宛に清彦出し相成らぬ。代價は
心算。請求相成らぬ。氏に無代
にせし決して受取り申す。牛は

馬は君は彼に由る。大に君の事共事と

擴張するを得ず、又彼に於て是の
友人を我に見せざるべし

右用事のサに申す、吾魔鬼が君を其に
る大に其心、其後に大なる平和に君に
臨むべし、惜むこと、彼の要求に應ず、
人おとを頼り、心か、世に、其

一九〇六年六月十六日

花巻
齋藤宗二

鑑三

✕
6-18

東京府豊多摩郡板橋町
大字和木九丁目九番地
内村 鑑三

陸中、花巻、川口町

齋藤宗二郎様



拜啓ニシテ、
此レ由雅有奉存ト同氏に於て、
別便小包を以て甘味志箱差上ト
間弟子供衆と共に御味以ヒラ度ト
大申上度、
草子及

六月二十二日

郵便便



陸
中國花巻川口町
齋藤宗三郎様

東京府豊多摩郡滝橋町

大字橋本北百拾九番地

内村鑑三

印刷局製

拜啓、至急の清書面に接し、驚き
と用封致し、いふ處、いふ計りも果物
亦三回の清贈興の清通知にあり、大
感謝大歡喜に有る、直に使と傳事
場に趨ませて之と受取り、うま目ここと
之を食ひ、い處、家族の者は目こ、其毒

多分花巻^{あはれ}まで達^たする^まらん^と願^ふ
 花巻^{あはれ}の大^{おほ}苗^{なえ}天下^{あまの}の名^な産^うつ^とと^まらん^と
 ち、茲^{こゝ}に重^{おも}か^て清^{きよ}好^{この}ま^をを^あけ^り
 グンデルト氏^{グンデルト}と改^か名^なす^して^いて^いる^にテ^ル館^{かん}と稱^な
 来^き週^{しゅう}安^{やす}島^{しま}日^{にち}ち^り其^{その}處^{ところ}に^て同^{どう}講^{こう}仕^しり^の
 小^こ生^{せい}が^が生^{せい}か^て始^{はじ}め^て監^{かん}つ^つら^らか^し會^{かい}内^{うち}に^て清^{きよ}
 座^ざが^が清^{きよ}親^{おや}に^て系^{けい}な^なる^るを^を清^{きよ}礼^{れい}と^と名^なす^す
 一九一〇七月一日
 齋藤宗二 鑑三

7-1

東京府豊多摩郡滝野川町
 大字柳本九百九十九番地
 内村 鑑三

28
1921年
七月一日

陸中花巻川口町
 齋藤宗二郎様

拜啓、霖雨漸く霽れ、夏清地
皆様清喜あり、あきさしより、有る。当方
庭園に於ける花巻、百合花は昨
今咲始めの由り、
其後、サ子病氣如何に、也一同心
配、致し居り、一日早く全快せん、と

とと新り居りか

貴兄には盛岡市本町百四十番
地ある山本能子ある婦人清承
知らぬや或り生若く清承内に相成
る機会も有之はは大畧清知
せと下たて親を其他其後の清承
伺ひたしなかり草々
七月廿日
内村 鑑三

7-21

東京府豊多摩郡滝瀬町
大字柏木九百番九番地
内村 鑑三

陸中花巻川口町

斎藤宗二郎様



秋冷相催し、塵沛地皆掃清
変りなきは、当方無異、曰、
旧き教友の信仰と委まざる者多し
と見え、悲歎の至りにたり。何や
数年の勤者の徒く成りしやう
に思はれ、日本人に對する信用
を博くせよ。は、因口致し、然し地方
諸君の堅固あると見え、大いなる
と強の申す。最も失望多し。は、大
女の陣中に清き、は、士博士
輩は、は、は、は、は、は、は、は、は、
宜しく報ふ。あ、は、は、は、は、は、
心死致し。草々、九月十五日

H

Union Postale Universelle.
CARTE POSTALE



きかほ便郵

東京市外相木

内村金三

齋藤宗三郎様



岩手県花卷町母

陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様



岩代本宮町

泉瀬方 内村健三



Yatta Postales

陸中花巻川口町
清水康を祈る
小まきる日
来る地に来り
居り教支と伝
全く傳道被し
居り今年日湯地
の送は就まの聖
靈候に此地に降
り感謝のまにまに
一九〇〇年十月四日

拜啓 東穂町、由大槻、松小
小舎は来る十三、当地公費途中甲有
にて大島氏を見舞ひ翌十等、先方へ
来る様り、清きし、就て、貴兄に於ては
直ちに明科、向け、市出、登、主、御
当地市立、界、清宿、泊、の儀、却て、清
所、に、市、立、小、舎、は、身、の、上、合、上、等
車、乗、り、参、り、市、立、有、市、返、り、途、に、申、上、り、ま、す



UJISAKI

SENIN

YAMASHIRO

料修 東穂可、市出く由大槻三橋
 小舎は来る十三、当地は昔逢甲甲有
 にて大島氏を見舞ひ羽立十甲、先方、
 来る後、市に市さし、就て、貴見に於て、
 直ちに明科、向け市出、登を、知
 当地、市立、市宿、活の儀、却て、
 所に、市さし、小舎は、身、体、の、上、合、上、
 車、身、り、参、り、市、右、市、返、り、市、に、申、上、
 十月、二、日、

郵便往復はかき (郵便)

陸中岡花巻

川口町

齋藤宗三郎様

東京府豊多摩郡滝橋町
大字柏木九百番九番地
内村鑑三



東京府豊多摩郡滝橋町

東京府豊多摩郡滝橋町

謹賀新年

愛する者よ、我れ汝の靈魂の榮ゆるが如くすべ
ての事に關して汝の榮え又健康ならんことを
祈る……我が子(友)等の眞理に歩むを聞くに
愈れる大なる恩恵我にあるなし。 約翰第三書二、
四節自譯。

千九百十一年一月一日

東京府下淀橋柏木九一九

内村鑑三

一千九百一十四年 中恩師与至



きかは便郵

Union Postale Universelle.
CARTE POSTALE

H

陸中國花巻川町
齋藤宗三郎様
花巻教友會
御中

先日柳田君清地より
帰リ、諸君の清容を
いっきと細話し有之。
諸君に對し清同情を
表すると同時に神と

贊皇大政し、殊に悪
魔の銳鋒が君に向
突入るを聞き、清田情
の至りに堪えず、君に厲
すべき者は必が君に残る
べく、君に厲せざるものはす

ん。君に厲せざるものはす

この後に君は主になりと改
め、[。]幸福ある者と

成るべし。成るべし。成るべし。
心こそ毒の成りたる。成るべし。
しちる人とはと新よ。

十年も来月第五十年

誕生日を期して雑誌法を
出のふかきと思ふ方々を
悩ます共、根を深く
同志の心に握えしは法は
容易く獲るゝぬ所なり
故に主の日の爲に致し

高野の日記

取のきの事

照井君、いかに其の他

實の法は、いかに其の他

1911 二月八日

鑑三



陸中花巻川口町
齋藤宗二郎様

ノ
2-8

東京府豊多摩郡経橋町
大守柏木九百拾九番地
内村 鑑三

花巻
齋藤宗二郎

拜啓、清書面ニ接し
甚だ心を痛ための申上
實は斯かる計劃の
あるを聞き、心を痛
人たのむる六日能く

横濱まで参りにて

時既に遅し已に運

勤の開始せらるしを聞

き多くの心配を以て帰

宅致しか然し金と友人

の好意に生し事ふれば

無事神に祈る事

成行に任かり他は途

中

齋茶板吉氏に就て

鳴浜村保竹松氏に

清向合せ相成り

委細清解りのちと夜

此の生は唯君が此事に
関し君の目下の清心芳
の上の果は清心の方を
加へては人々の心を
生かすに君は頼り
有るに 敬具

川口十日

鑑三

花巻川口町

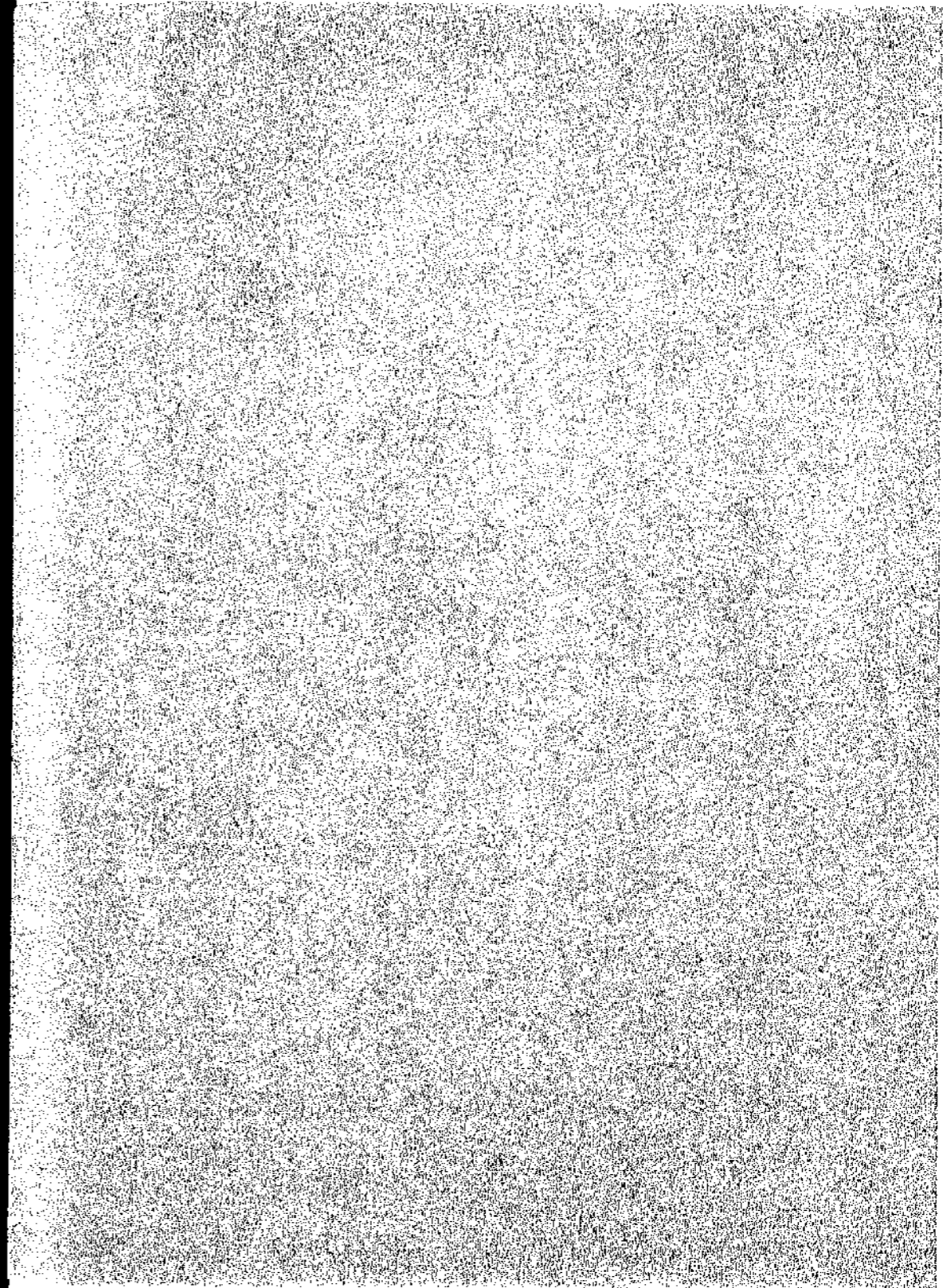
齋藤君



陸中花巻川口町
齋藤宗一郎様

✕
2-10

東京府豊多摩郡延福町
大字柏木九百拾九番地
内村鑑三



清書面正に辨文ハツ
サ子の件ハ舟之思見左に

申上ハ

小生は彼女が着目サ渡ル婦
に成るは不替員成に有之ハ
彼女の艱所を以てしては
到底之に堪え得た存ハ

小生は彼等の或は縫教
師たるに梵唄成就しり
而して其準備として上
京するにも梵唄成諳しり
然し月十田にこそ當地にこ
は修業中も時見來おく
か最少額十五田を要
すべし小生方にこそ出來
得る限りの便宜は之と與
へ申すべし得共然し専心
修業するたのめは市中に
寄宿するの必要を有之爲
め十五田以下にこそ無理
に清きか

清地諸兄妹の此世の
事に關し種々と艱苦
を嘗つたこと聞と深き
清同情に不堪なり然し
是れ九神が諸君を以て
清地に在りし彼のたの
美を證明と爲し給ふ
かためとなりし福喜日の光
は一層強く諸君を以
て清地に輝き申すべく
故に諸君は艱難の故
を以て返して感謝ある
べきことなりと云生近
頃馬可傳十三三年を

讀み其十一節以下に
至り大に君と照井君
との事と思出しに
金は近刊雑誌法道
法承知と来たる句

1911三月九日夜

鑑三

花巻

南条君



陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様

3-10

東京府豊多摩郡花巻町

大字柏木九百拾九番地

内村 鑑三

特除只其後由兄大
けは先つ以て益々清健

ユシケル氏住所生
ヤオイ
康系市本郷区弥生所一

全の由大慶に存の種
々の清凶災難も其内には
終焉と告げ申すべく、
それを帝位に承るに清
働くまふさるべきなり。

叔又其母時節に相成り

清多忙の事と違ふ事

仕り執るは只今かのユンケ

ル氏より其の面有之、其の

通り貴又ハ清注文教

ありやうはとのちとに有之なり

莓成熟中は毎週
二竹相つ、同氏に死清

發送相成りたき事

大粒成熟の上は其

外特。に。三。三。竹相。清奈

送相成りたき事

右の通り有之り何

分宜と頼る代償の事

は清清東次郎等同氏より

清送り申すなり

多分ニニケル氏に由て由

兄の世母は京地の所謂

上流社会に紹介さるべく

循々多少代償を引上る

とも決し不当の事には

無之と云ふ事なり

ワサ子母の無之。清め

心とさるべから

池田政侯廢業の目的

早からんこと切望仕

四肢の一を失ふも天國に

入るは善きことの言は特に

斯かる場合に適用すべし

者となるが轉業の印は

せざるべし

左用事方々申上る草

1911 五月十三日

鑑

富川君



齋藤宗二郎様

陸中花巻川口町本城五三

✕
5-13

東京府豊多摩郡花巻町
大字柏木九百拾九番地
内村鑑三

拜啓。例年の通り
葛沢山に清送り
ヒ下有難奉有。
又今年も神が君
に健康と信仰と。

又雨と日交とを賜ひて
此産あらしめ給ひし
を深く感海致し
清家庭の事成るに
きやうに成りつゝあるも
義はり日之カ又感海
致し君がキリストに
来りし以上は悪魔
か其子供を取去るは
当然の事有之
池田政代の事同情
に耐えずに乍然日之カ

又彼女に臨むべき難

苦に有之んことなり

聖霊の力、十字架の周

圍の境遇に打勝ち

彼女として正妻に復

するを餘義我ふしせ

いの人おしと新キリストのリイヨ

くの場合には物質

上の援助彼女の手に

落つんことなり

多くの艱難を経て我

等が神の國に至るも

サと

も異なりも彼女に決
傳つてゐたかゝる行傳

十四章廿三

つさ子只今六つ参り
居り思ひしほど悲し
くは無之容子に有之
り今夜は泊請させ

後事はユツリ相談
被まぶぐり小生方
家内も昨秋以来ハッ
キリ致さず常々幸
病人に之困ハリ幸
小生は至し健全に有

之

三
右 清礼かたし申上
草

1911 六月五日

鑑三

花巻
角桑丸

十
6-5

東京府豊多摩郡花巻町
大字柏木九百拾九番地
内村 鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様



拜啓甚だ汚痛心の
事とは存じか得共ツサ
子の心とに付き左に申上
今日家内同道致し

或る醫馬字士ニシヤノ
診察を乞ひに馬女全
脚氣のや、重き症に
有之、今日直に轉地
療養を乞ひにす
此は危險に陥る

此は有之由とす
清養の
通リ東京の地は脚氣
は甚だ甚しく、故に彼
女を此地に留る置くと
甚だ危險に有之

去リて今日直ニ花巻
まで送還すも甚だ言
の毒に有之。且ツは冷
軍の長旅行は危険
に有之由。就ては生
に於て海岸線下孫が
又山平辺きんも同伴哉
オハムル其處まじ清
地よりトナタ加清出迎
ハを頼むは如何かと
有か。何れ明日は是非
彼女を控室へ引取り、
其後ニ之出生三確定

次第電報に申し申上
ご川子 可然清世見控
預方

種々困難の貴地諸
君の上に加はるは生に於て
も忍みざる所は有之

其日之火又聖王意の

ある所は火は毒をハシ清

忍みざる所

左取急を申事

草

六月十日夜

鑑

宗二郎様

6-11

東京府豊島区雑司が谷町
大字柏木九百拾九番地
内村鑑三

陸中花巻川口町

南藤宗二郎様



陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様



陸中花巻川口町

大守相木丸百拾九番地

内村

陸中花巻川口町

特修昨夜

鉄道便と

供水以前に

十五冊差出

置るに左

清系知

七月五日夜



祥降日、暑氣今に
嚴く、處清地皆
様に清きなり。無
之、暑と清きなり。
陳は娘ルツ病氣に

付るは先日来る女子
清同情に與り感
海つぎるにあり、彼女
其後は一時下執致
しかも其二三日前より
又々奔執致し、容子

面白く無之、大に失
望致し、夕トハ全
快するとも一人前の女
とは成り得ざるべしとは
二木野高夢博士の申
渡りに有ん。

神は我等に多くの
歡喜を與へ給ふと
時々又少しの苦痛を
與へ給ふ我等の少し
の苦痛のために返こ
神の國の樂をより深く

感_んず_るに_まは_さる_べし_と思_はれ_り

新法只今發行

今より又送は着る手

致すことか 甚なり

1911八月十一日

鑑三

29
180+120号
八月十一日
8 11
3-12

陸中花巻川口町
齋藤宗三郎様

✕
8-11

東京府墨田区横濱町
大字柏木九百拾九番地
内村 鑑 三

花巻
齋藤宗三

拜啓、二種の清贈
物大感謝と以て正さに
落尚平仕候、其如何ふ
る感と我等の心、惹起
せし事は清推察に仕かし

幸ひに

当方病人恢復の目

込 未だに立ち不申、日々心

を痛の居りか、小生等に於

て未だ神の小生等に候はる

聖旨と發見まゝに至らざる

が故となりに恢復の希

望あるが如くに見えて實際恢

復の途に就かざるは全く之れ

が為のと書申はなから、尚ほ此際

神の聖旨とありは利害を得

失と辨察申すはいとよく断

然之と書行するは、小生等

のために清新にたふすなり

ツサ子の病氣に就てもツサ子の病氣同様小生等夫妻は心配致しか、小生等の祈禱は常に同時に二女に及び申候、神が此際二女の上には異能を現はし給ひて清五の信仰を達の爲は

人々の心を安んずるの功業にあり

の

清五附に清五貞献と

か、清五の諸兄妹、母大か

も、母へ清五の御心を

草子

1911 十月廿八日

鑑三

花卷
齋藤君
外諸君

十月廿八日

東京府豊多摩郡花巻町
大字柏木九百拾九番地
内村 鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様



汚書面有難く辨讀仕り

ツサ益々衰弱の由、痛歎の至りに不堪か

小生是非一度見舞に考上致したく存す

彼女に例の化合酸素を用つて見たら如何

何にせよ必ず効能あるふらんと思ふから、当方

目下ルツに之を使用致し居り、使用を終

つてより十日に相成り得共、確かに効能有

之やう見えなすけりしか。今西家一家の本店
頭ふらは四十両の金は惜むに足らざりしは、
木服女史には高は六七箱持合せ有之
容子に有之か。

照井君りらマヌの由、清地清君に艱難多き
を痛サ然し神は諸君の清信仰相應り
試練を下し給ふことあり。清勇戦あつんと
と頼ふ。草々 土月廿四日 葉橋
青田系君 鑑三

十一月廿四日

東京府豊多摩郡忍城町
大字柏木九百拾九番地
内村 鑑三

陸中花巻川口町

齋藤宗二郎様



拜啓、クリスマスのお祝い

電正には拝受伝ひ

まゝ三日清地より帰宅

病人の病一層進みし

を察見致し、四日医師

より死の宣告あり、長くと

も二週間も持つまいとの
事、有之、其時断腸
の感有之、君は其、如
何なる感よる乎は、さう
清承知に有之、依て
死の準備を致し、**「二
週間も死せず、
師も少しく赤面の様
に有之、然るに、廿五日
に至り、又々最後の宣
有之、今夜は危し、
の事、有之、其夜は十**

生は殆んど一睡も改さず
長くして今年一杯との
事に有之れ然しすつこの
状態より老い見の高は
二三日の中は死さうとは思は
れわが依て醫者師は其
日限りに断せり申は今年に
新禱と着て慶とのやに
有之れ而して壽しきふ
る事には病人には之が
大満足に有之れ彼女
は今後醫者師と招く
及ばずと申し居り而し

と神に依り全癒を期し
居りし。又家族の者も
大に平和を感じ、醫師
の宣告を無視し居りし。
是れ尚方今日の状態
に有之。此の生に
如くこの経験に有るが
病人に未だツサ子の永眠
を告げず、故に彼女は今
尚ほ床中に病を集むる
居りしと思ひ、母に向て申し
ツサ子人は可愛相心だ、
何かが返して送つてやり

たゞ私も永の病氣に
て他人より物とせ買ふて
非常な嬉しき人、ツサさん
ゆさき同じであらう、何が
買て送つてやりたい、ツサ
さんは代表物が好きだ、
女持の紙入を買てまゝ、

と、母は拒み難く、まゝとて
又今ツサの紙入と告ぐる
能はず、依てルツ子の依
頼通り女持紙入を
買奉り、依て別便と
して之を由良の清牛許
まご送り申す、此は自

巻細高橋家の清申
傳のこと、右紙入の清
渡しと云ふたこと、ツサミは
地下に在りし候と云ひし
事喜ぶ事と云ふなり。

信仰と愛と希望、此
三つは恒に在るなり。感
謝すべし哉。

水澤の方、其後、妻の
あきまつし、常々心配
致し居りしが、清申の節
宜しく清傳のいふたは、
清地清見妹のも同様

勸告 草々

1911 十二月廿八日

鑑三

花巻

南藤君

十二月廿八日

東京府豊多摩郡流橋町
大野泊木九郎九郎地
内村 鑑三

陸中花巻川口町
旧城内

齋藤宗二郎様

